

むかしむかし、「アーム筆入れ」というのがあって、「象が踏んでも壊れない」というキャッチで流行っていたそう。それを信用したある男が、アーム筆入れを動物園にこっそり持って行き、象の檻のなかに入れたそう。ところが、象に踏みつけられると、筆入れはグシャツと音をたてて割れてしまったそう。「おかしい。割れてしもたやないかっ」。

男は激怒したが、そのとき、象がぼたぼたと大きなウンコを筆入れのうえに垂れたそう。男は、ぽんと膝をたたき、「そうか、わかった。『象の糞でも壊れない』ゆうことやったんか」と言ったそう。今でも、アーム筆入れは製造されているらしいが、「象が踏んでも壊れない」というキャッチは使われておらず、「象のマークは強さのしるし」というキャッチにかわっているそう。さてさて。

前回、パソコンがクラッシュしてどえりゃー騒ぎになったことを書いたが、とりあえずその続報である。新しく買ったパソコンは、どういいうわけかまるで言うことをきいてくれず、立ちあげようとすると、毎度毎度、必ずフリーズする。それも何度も何度も。ちゃんと使える状態になるまで、三、四度は電源をオンオフしなければならぬのである。あまりにおかしいので、購入店に電話して、ちゃんと一発で立ちあがるように修理してくれ、と言うと、「梱包して送り返してくれ」というので、そのとおりにした。しかし、いつまで待っても

連絡がない。やむなくまた電話して、送った修理品は届いてますかと言つと、ちよつと調べてみますとの返事。しばらくして、「ああ、届いてます届いてます。今から、見させてもらいます」……まだ見てへんかったんかいっ。その旨を柔らかに申しあげると、「メールをいただいてなかったものですから」。パソコンそっちに送つとんのに、どないしてメール打つんじゃっ。そして、一週間ほどして、「手元にしばらく置いて様子をみましたが、ご依頼のような現象が起きませんでしたので、そのまま送り返します」という連絡とともに、ブツが戻ってきた。もちろん、電源を入れようとすると、ちやーンとフリーズするのである。もう、このパソコン、デスクトップのゴミ箱に本体ごと捨てたい。というわけで、専門家がさじを投げた状態のパソコンをだましだまし使っていたのだが、またトラブルが起きた。これまで「ウイルスバスター2002」というのを使っていたのだが、なんだかいろいろ不具合があるので（おもにメール関係のソフトに悪影響がある）、「ウイルスバスター2004」というのを購入した。これは、そのあたりの不具合は解消されていると聞いたからである。ところがインストールしようとする、「前のアンインストールが終わってません。終わらせますか」とか何とかメッセージが出て、「はい」と指示を出すと、いきなり画面が青くなり、なんだかおそろしげな英文のメッセージがずらずら出て、そこには、おまえのパソコンは今、どえりゃーことになつとるから、再起動させて、もう一回このメッセージが出たら、もうおしまいだから、ポンコツとして粗大ゴミに出しなさい、みたいなことが書かれているのである。そして、なにもしないのに勝手に再起動して、「おまえのパソコンは深刻なトラブルから回復したが、このことをマイクロソフトに告げ知らせるかどうかすぐに決める」などとい

うメッセージが出る。いろいろ手を変え品を変えやってみたが、絶対にこのパターンから抜け出せない（私のパソコンは購入して間もないのに「深刻なトラブル」に百回ぐらいみまわれたことになる）。このままではせつかく購入した高価な「ウイルスバスター2004」は無駄になるということだ。

あまりのショックに深夜の街を放浪していたら、親切な我孫子武丸さんとはったり遭遇し、耳よりな情報を教えてもらった。ウィンドウズXPは、復活ポイントとかいう作業をすると、ソフトがインストールされるまえの状態に戻せるというのだ。さっそくやってみるとうまくいき、ようやく2004をインストールすることができた。ただし、起動時のフリーズはあいかわらずだし、ADSLがまるでつながらなくなったり（再起動するにつながらる）、いろいろ不具合は多いが、まあ、面倒くさいので、ほったらかしてあるのである。以上、報告おわり。

さて、話はころつと変わるが、最近、七十年代がブームだそうである。クレヨンしんちゃんの「大人帝国」を見てわかるが、二、四十代のオタクな大人がブームの担い手であり、享受者である。「キューティー・ハニー」や「デビルマン」「鉄人28号」「ハットリくん」などが次々とリメイクされ、歌謡曲でも「異邦人」だの「いい日旅立ち」だのが復活している。古い酒を新しい革袋に、え？ 逆だっけ、とにかく、そういうことなのかもしれないが、やはりオリジナルの熱気というか同時代性に匹敵するものを作り上げるのはムツカシことのようにである。

で、こないだ、赤井英和とトミーズ雅が司会の深夜番組「うきげんブランチニュー」を見てみると、「子供の頃に好きだったギャグ」という特集があり、非常に懐かしかった。吉本新喜劇はいまだに基本的にはギャグの応酬で成り立っている

わけだが、やはりギャグの黄金時代は「あの頃」でしょう。というわけで、懐かしいギャグについて無意味にだらだら回想してみた。

我々が子供の頃のギャグといえば、やはり赤塚不二夫先生のもものが定番だった。イヤミの「シエー」は、派手な動作を伴ったギャグという点でその後の先駆をなすものだったし、八夕坊の「八夕坊だジョーっ」とかデカパンの「ホエだすホエだす」とかダヨーンのおじさんの「ダヨーン」とかニヤロメの「ニヤロメ！」とかケムンパスの「ケムンパスでやんす」とかベシの「ベシだべし」とかレレレのおじさんの「おでかけですか。レレレのレー」とかそれこそ枚挙にいとまがない。やっぱり赤塚不二夫は天才だ。まあ、ギャグなのか「口癖」なのかわからんようなやつもあって、たとえばバカボンのパパの「なのだ」というのをギャグとは考えにくいけどね

(「これでいいのだ」はギャグですよ)。これがギャグなら、ハム太郎も毎度毎度ギャグをかましてることになるし(ハム太郎の声が故雨森雅司さんだったらしいのに。ハムスター仲間、バカボンみたいにほっぺに渦巻きがあるやつもいたよ)うな気がする。我孫子武丸という人がこないだ、「ハム太郎はさっぱりわからない。あいつら、飼い主に飼われてるのに、そこをこっそり抜け出して、国みたいなもん作ってるねんで。なんやねん、あれは!」と怒ってたが、なんやねんと言われてもね。我孫子さんは、黒田研二さんというミステリ作家が、ハムちゃんずの映画を見に行って、すっごくよかったけど、同時上映のゴジラは観ずに帰ってきた、というのを耳にして、またまた「理解できん」と怒っていたが、好みは人それぞれなんすから、「でござる」とか「でござんす」とか「だっぴー」とかいうのもギャグということになる

(でも、「黄いくん、ひよじじゃないっぴー」とか「あっぱれ、

おじやるさま、にて小鬼どもを追い払われました」とか「これはこれはいつの日か少女マンガで一発当てようと思っ  
ていらつしやる薄井さちよ二十八歳独身さま」とか、ああい  
うのはギャグかも。すごく括弧のながなが長つたらしい文章で  
読みにくいでしょう。

えーと、話がめっちゃめっちゃそれたが、赤塚ギャグと同時代  
のものといえば、クレージーキャッツだろう。谷啓の「ガチ  
ヨーン」とか植木等の「およびでない」とか、時代はちよつ  
と下がって「ゲバゲバ」の頃になるけど、ハナ肇の「あつと  
驚くタメゴロー」とか「あんたかてアホやる。うちかてアホ  
や。ほな、さいなら」（これがなぜおもしろかったのか、今  
では全然わからない）とか。「おもしろびれびれテレビレビ、  
へばらばへばらばちよんまげら」とかいうのもあったな

(つろおぼえ。「ゲバゲバ一座のちよんまげ90分」のギャグだ  
っけ?)。関西初では、「てなもんや三度笠」のなかの「俺が  
こんなに強いのも、あたり前田のクラッカー」とか「誰が力  
バやねん」とか「キビシーツ」「サミシーツ」。ヒジョーに  
サミシーツ」とか「ズンターツタズンタツタ」とかも大ヒッ  
トして、みんながまねをした。

クレージーのつぎは、なんといってもコント55号とドリフ  
で、コント55号は、「いちじっさんしー、二ーじっさん。

にーじっさんしー、さんじっさん。さんにーさんしー、しー  
じっさん……」とか「飛びます飛びます」とか。ドリフは加  
トちゃん(大矢博子さんが収集している)が「ちよつとだけ  
よ、あんたも好きねえ」とか「うんこちんちん」とかギャグ  
量では群を抜いていたが、荒井注の「なんでえ馬鹿やろう」  
とか、いかりや長介の「おーっす」とか「べろんちよ」とか  
「だめだこりゃ」とかもあったなあ。「宿題やったか、歯あ磨  
けよ」とかもギャグの一種かも。



「責任者出てこい」とか宮川左近シヨ一の「なんでこんなにうまいんやろ」とか、Wヤングの「ちよつと聞いたあ?」とか、寛太・寛大の「ちよつと待ってね」とか、チャンバラトリオの「聴きたくない聴きたくない」とかなんぼでもある。話芸で勝負している人たちでも、ここぞというときの決めぜりふは持っていたものである。

さて。今回、一番書きたかったのは、「落語家のギャグ」である。落語家はギャグを持っているのか。三枝さんの「オヨヨ」とか「いらつしやーい」とか、仁鶴師匠の「どんなかなー」とかももちろんギャグなのだが、それは落語家というよりタレントとして使っていたもので、落語のなかでギャグ的な使われかたをするセリフを持っている人というのはいらぬだろうか。います。故桂枝雀師匠がそうだ。「夏の医者」で「お日いさんがカーツ」と言いながら、自分の禿頭を強調するところとか、酔っぱらいが舌が回らなくて言う「すびばせんね」とか、「延陽伯」で風呂のなかで言う「めでたいなー、めでたいなー、あんたの頭はひらきたいなー（ぺしやっ）」とか、「寢床」で立ち上がったまま叫ぶ「おがおがおがおがおがおがおが」とか、「八五郎坊主」で寺の門をあけるときの「がらがらがらがらがらがら………」とか、「鷺とり」の鷺を呼ぶ場面で「鷺はあほでんなあ」「おまえのほうがあほじゃ」とか、「代書屋」の「一字抹消」と。判をこつち貸しなはれ」という繰り返しのセリフとか、「宿替え」で壁をたたいての「わー、ここならここ。わー、どこならどこ」とか……こう書いているだけで思いたしてくる傑作ギャグの数々。そう、それはまさに「ギャグ」としか呼びようのないものではないか。枝雀は、落語のなかにギャグを満載させたはじめての人物なのではないのか。それまでの噺家が「くすぐり」として扱ってきたものを、「ギャグ」にま

で過激に過剰に高めたのである。それが枝雀さんのいつていた「落語の漫画化」ということだったのだと思う。もちろんそれは両刃の剣で、くすぐりをギャグにすることによって、落語全体がどんどん漫才化、新喜劇化していき、晩年のようなやたらと長尺の落語につながっていったのではないか。仁鶴師匠や春輔さんもそういうところがあったが、枝雀さんほど徹底した人はいなかった。そういつた、すぐに「徹底してしまう」「突き詰めてしまう」ところも、枝雀さんの性格的な特徴だったのだろうなあ。ああ、没後これだけの時間を経ても、いまだに桂枝雀について何かを書いたり語ったりすることは私にとって激しい痛みをともなう行為なので、中途半端な私たちではやりたくなかったが、今回はついついやってしまった。いずれ、きちんと枝雀師匠のことを書くころ、と決意したところで本日これまで。

(了)